

# 副詞「よく」の意味を規定する基準のあり方

川 端 元 子

キーワード：文脈 到達目標 事態の実現 評価基準 前提と期待

## 1. はじめに

副詞「よく」には、大きく分けて程度、頻度、評価の三つの用法があるとされる。これまで「よく」は、日本語を母語としない学習者に生じる誤用の要因をとらえるために取り上げられることが多かった。とくに、「よく」が日本語の文章や会話に頻出する初級語彙と位置付けられているにもかかわらず、程度や頻度の意味で用いる時に制約が多く、誤用が生じやすいことが問題となってきた（近藤1986、森本1992）。そのような理由から、「よく」についてはその共起制限や「よく」が修飾する語句の性質、それを通して読みとれる「よく」のあらゆる意味についての考察が多い。そして、その考察の主旨は、意味が類似する置き換え可能な様態、程度、頻度の他の副詞と何が異なるのかという相違点を探りつつ、「よく」の特徴を捉えようとする点にあった。

一般に、「よく」の三つの用法は、「よく」に修飾される動詞句によって異なる意味に解釈される。しかしながら、程度と頻度の意味用法の境界線が必ずしも明確でないこと、「よく」の意味が、様態の副詞、程度の副詞、量や頻度を表す副詞、評価副詞などに分類される他の副詞との共通点を持つことも指摘されてきた。このことは、近藤（1986）において、「よく」が修飾する語句が同じ動詞句であっても、「共起動詞の性質だけがその意味を一意的に決定しはしない」と述べられていることから確認できる。たとえば、次のような例である。

- (1) いつもよく食べるね。(量)
- (2) うどんは好きだからよく食べるよ。(頻度)
- (3) そんな色をしたものをよく食べるね。(評価)

(3)のタイプの「よく」を近藤（1986）では、ムードの副詞とするが、程度や頻度の意味との連続性については、これまであまり考察されてこなかった。

そこで、本稿では多義的とされる副詞「よく」の基本的な意味をとらえ、評価の「よく」の意味について再考したい。そして、「ムードの副詞」「誘導副詞」(近藤1986)とも位置づけられるその意味のあり方について考察する。

## 2. 「よく」の各用法の特徴

### 2.1 「よく」の各用法の概観

まず、「よく」の意味として指摘されてきた程度、頻度、評価の意味や用法について川端(2016)をもとに、概観しておく。

#### 2.1.1 程度の「よく」

程度を表す「よく」は、修飾する動詞句の意味によって質の高さと量の多さを表すものの二種類がある(佐野2006)。質の高さを表すものは、森本(1992)が様態の副詞に近いとし、佐野(2006)が事態の実現度の高さを表すとするものである。これらは、「一生懸命」「注意深く」「じゅうぶんに」「しっかり」といった意味や、「うまく」や「じょうずに」「きちんと」などの意味に置き換えられる。

(4) 今日のカレーライスは我ながらよくできた。

(5) その洋服はあなたにとってもよく似合う。

なお、このタイプの「よく」は、「高度に」「とても」といった語句との置き換えも可能で、意志のモダリティとの共起制限があるため、「とても」「非常に」などの一般的な程度副詞との類似性があるとされる。一方で、程度副詞「とても」「非常に」などの程度副詞に修飾されるため、程度副詞よりも実質的な概念性の保持の度合いは高く(萩原2005)、それも様態の副詞と分類される要因となっている。

一方、量の多さを表す「よく」は、次のようなタイプである。

(6) 彼はよく働く。

(7) 彼は毎日よく食べてよく歩く。

これらは「じゅうぶんに」「たっぷり」「おおいに」などに置き換え可能である。

#### 2.1.2 頻度の「よく」

頻度の意味をあらわすものは、「一定期間内における、ある事象の繰り返し生起度数の多寡」(森川2008)をあらわすもののうち、多頻度や中頻度をあらわすとされるものである。

(8) 最近この辺りで彼をよく見かける。

(9) 太郎はよく芝居を見に行く。(近藤1986 用例16)

このような頻度の「よく」は、「頻繁に」「しばしば」「しょっちゅう」という意味に解釈でき、置き換えも可能である。

なお、程度と頻度の「よく」は、動作や行為の実現量と実限度数の両面から実現度の高さが表されていると読み取れる場合には、意味が接近する。

(10) ゆっくりよく考えて決めてください。

上の例では、「じゅうぶんに」という意味と「何度も繰り返して」のいずれの意味にも解釈できる。したがって、どちらの意味であるのか、あるいはどちらをも意味するのかの判断には文脈の情報を読みとることが必要になる。

森川(2008)は、このような現象をふまえて頻度には二種類の意味があると述べ、一つは事態生起回数や事態数の多さ、もう一つは「日本語の頻度の概念は程度および量の概念から派生した、より高度な概念」だとしている。そして、後者のような頻度の概念は、実質的な概念性が乏しく具体的な意味概念を伴わない点で、他の頻度の副詞とは異なる性質を持つと指摘している。このような特性は、森本(1992)の、他の頻度を表す副詞と比較して抽象的な概念であるという指摘と合致する。

### 2.1.3 評価の「よく」

評価の「よく」は、副詞における「多くの場合に文頭(句頭)に位置して、後続のことがら内容全体に対する真偽や予想との異同といった話し手の評価・コメントを表す用法」(工藤1983)をもつものに分類できるタイプである。

(11) よくこんな遠いところまで来ていただきました。

(12) さぼってばかりなのによくレギュラーからはずされないね。

このタイプは称賛や驚き、呆れといったものをあらわすことから、ムードの用法、誘導副詞と似た用法とされてきた。しかしながら、この「よく」は発話の場面の文脈情報をもとに意味が決定されるという点で他の用法とは異なる性質をもつため、これまで同列に論じられることがほとんどなかった。

これらの三つの用法は、質の高さを表すもの(程度)→量の多さを表すもの(程度)→評価を表すものの順に、実質的な概念性の希薄化が進む(森川2008)とされてきた。この点に注目し、評価の「よく」の特性を見ていく。

## 2.2 「よく」の意味の解釈と文脈情報

「よく」の意味を解釈するためには、「よく」に修飾される動詞句以外の情報が必要だと近藤（1986）が述べていることはすでにあげた。さらに、森川（2008）にも、頻度をあらわす「よく」の修飾先は、文を含めたものに拡大されることがあるとの指摘がある。では、「よく」に文脈情報が必要になるのはどのような場面だろうか。

機械翻訳において、「よく」の適切な訳語を選定する条件の設定が容易ではないことが小倉・Bond（1998）において指摘されている。小倉・Bond（1998）では、副詞の機械翻訳における訳語選定の方式を確立するために、副詞と被修飾語句との関係から訳語選択条件を設定している。

ただし、この方式で訳語を決定する条件としている場合、機械翻訳で生じる問題として次の例をあげ、この問題点の解消には、文脈情報を担う語句を抽出してその情報を訳語選択に反映させるシステムを組み込むことが必要としている。

(13) [理想式] He often sees movies. （小倉・Bond用例、下線筆者）

(14) [本方式] He sees a movie carefully. （ " ）

この例から、小倉・Bond（1998）の機械翻訳方式は、「よく」の程度と頻度の意味を被修飾の語句の意味のみで訳し分けることが困難であることがわかる。すなわち、程度や頻度の意味は、動作の実現レベルが最高レベルか普通以上に目立つものであるという点で共通する程度修飾の一種とみなすことができる。よって、程度と頻度の意味の区別を含めた「よく」の意味の詳細な理解のためには、文脈情報を読み取る必要がある。

なお、ここでは評価の「よく」は、英語に翻訳する際は述語として表現されるべきだとして考察には含まれていない。しかしながら日本語において評価の「よく」の意味を解釈するためには、同じ語句を修飾しつつ程度や頻度の意味と区別されることに注目し、文脈情報がどう関わっているのかを考察する必要がある。そこで評価の「よく」の意味を程度や頻度の意味と関連づけて統一的な説明ができるのかについて検討していくとともに、その文脈情報について探っていく。

## 2.3 「よく」の共起制限について

程度や頻度の意味の「よく」には、意志・願望を表す文や命令・依頼文との共起

制限がある点で、程度副詞と似ている。

(15) 最近この辺りで彼とよく会う。

(16) \*これから彼と[\*よく／頻繁に／しょっちゅう]会いたい。

(17) 残り5分で10点差は厳しかったが、よくがんばった。

(18) 残り5分で10点差は厳しいだろうが、[\*よく／しっかり]がんばりたい。

このような「よく」の共起制限は、程度副詞と同じく「よく」が実質的な概念性に乏しい副詞であることをうかがわせる。このような特性は、森本(1992)における他の頻度を合やす副詞と比較して抽象的な概念であるという指摘と重なる。

そこで、「よく」の共起制限を生み出すとされる評価性を探るためにも、「よく」の有する実質的な概念性のあり方という点から、機能の類似する他の副詞と比較して確認していく。

### 3. 類程度や頻度を表す他の副詞と「よく」の相違点

#### 3.1 形容詞由来の副詞「すごく」「ひどく」との相違

「よく」と同じように形容詞由来の程度修飾機能を持つ語句として、「ひどく」「すごく」があげられる。これらは、原義の意味から質的程度を表す場面で実質的な概念性を残すものと考えられる。しかしながら、次のような場面でふるまいが異なる。たとえば「よく」は、「驚く、怒る」などの心的活動動詞、「軽蔑する、尊敬する」などの態度の現れに関わる動きをあらわす動詞、「効果がある、異なる」などの状態動詞、「争う、ちらかす」などの否定的な意味を持つ動詞を程度修飾しないか、しにくい(佐野2006)とされる。この点は、「よく」に原義からの実質的な概念性が残っていることが確認できる。しかし、「すごく」「ひどく」とは異なるものである。

(19) 彼は[よく／すごく／??ひどく]怒る人だ。

(20) 負けはしたが[よく／すごく／??ひどく]がんばった。

(21) 彼女の叱責が[\*よく／すごく／ひどく]応えた。

上の「よく応えた」が許容できるのはこの文脈ではなく、「応答した」のように、事態の生起や達成・実現回数多さを表す場合に限られる。三つの中では、「すごく」はどれも修飾可能だが、「ひどく」は否定的な意味の状態を修飾しやすいという点で、「よく」より実質的な意味が残っていると見える。この「すごく」「ひどく」

の程度修飾は、質的高度に限らず、事態の程度を強調する機能を持っている。

### 3.2 程度副詞との相違

程度副詞は、3.1であげた「よく」が修飾しないタイプの動詞を修飾できる。それらの動詞の意味が、その活動における動きの量や状態の程度段階をあらわすことができれば、形容詞などと同じ相対的な状態性を持つものになりうるからである。その点で、程度副詞の方が実質的な概念性が乏しい。

一方、「よく」は、「そびえる」といった状態動詞、形容詞や様態の副詞には事態の達成や実現という区切りがなく、また、頻度の意味を取り出すことができないため、程度修飾ができない。近藤（1986）が「動作の遂行によって生じる何らかの状態を指向し、『よく』はその状態への接近度の意を含むのではないだろうか」と述べるように、「よく」が修飾する対象には事態の実現、動作の遂行ということが鍵になると考えられる。

このことは次の例でも確認できる。

(22) よく書く。(頻度)

(23) よく [書ける／書けている]。(達成度)

「よく」が「書く」を修飾するときは頻度の意味になるが、「書ける」や「書けている」といった達成・実現すべき事態の実現度を示す場合には、質的な程度修飾として共起する（川端2015）。そのため、「よく」が目標（ゴール）となる事態の達成・実現を設定できず、無制限の程度段階が進行していく開放的な程度スケールが設定される場合は、「よく」が出現しない。

(24) ここは [\*よく／すごく／ひどく／ひじょうに] さびしいところだ。

(25) 彼はチーム内で [\*よく／すごく／\*ひどく／ひじょうに] 頼もしい存在だ。

このように、「よく」はあくまで行為や動作の実現が必須であり、その実現度を評価するものである。そして、否定的な意味の語句を修飾する場合には頻度の意味に限られるなど質的な高さを評価する。「よく」が原義のもつ肯定的な評価という実質的な概念性を保持していることがわかる。

### 3.3 様態の副詞や量の多さを表す副詞との相違点

「よく」が量の多さを表し「たくさん」「たっぷり」に置き換えられる場合は未

実現の事態を修飾できる。しかしながら、実際には「じゅうぶんに」や、佐野（2006）も指摘するように「たくさん」を使った例で「よく」に置き換えられない場合が多い。次の例を見てみよう。

(26) 今日は [よく／うんと／おおいに／じゅうぶんに] 食べた。

(27) 来月にはヒナが [\*よく／うんと／\*おおいに／\*じゅうぶんに] かえるだろう。

(28) この広さなら [\*よく／うんと／\*おおいに／じゅうぶんに] 置ける。

「よく」の表す量的な多さは、頻度の高さによってその事態が目立つ特徴的な傾向であるとうけとめられることによって解釈が成り立つ。したがって、「じゅうぶんに」と同じような主体や対象の数量の多さを表さない。また、「うんと」は量的な多さを表していたものから、その総体が大きいことのイメージを拡張した程度強調（川端2012）、「おおいに」は状態が増幅することをもとにした程度強調、「じゅうぶんに」は条件への充足の度合いを図るものである。「うんと」「おおいに」「じゅうぶんに」は、いずれも未実現の事態への共起制限はない点で、「よく」の方が実質的な概念性が希薄であることを示している。

#### 4. 「よく」の程度修飾のあり方

##### 4.1 「よく」の基準とする到達目標

これまで、「よく」が質的に高度であることを表し、量的に十分と言える基準を満たすということを表す点で、実質的概念性を持つものであることを表していることを見てきた。では、「よく」の程度修飾とはどのようなものだろうか。

(29) すぐに信じないで、自身の目でよく確かめなさい。

上の例では、「納得できるまで（徹底的に）」「それが実現する状態まで（完全に）」を到達目標として設定してそれへの接近度を「よく」が表している。しかしながら、程度スケールの最大値への接近を表す程度副詞「とても」「ひじょうに」には置き換えられない。確かめるということ自体は「どれくらい確かめたのか」と問うことができるが、「よく」が表す程度は到達目標とする状態を達成したかどうかという達成・実現の可否を問題にするため、程度段階を評価しているのとは異なる。

なお、次の例から「よく」または「よく確かめる」が到達目標とし、達成・実現の可否は、個人や場面に依存するものであることがわかる。

(30) 本当によく確かめたのか。

(31) それでよく確かめたとは言えない。

(32) もっとよく確かめろ。

このように、「よく確かめた」という状態の実現のあり方は、あくまで話し手やその発話環境において各自が設定するものだが、「よく確かめた」といえる状態そのものがその場の到達目標ということになるため、程度副詞のような程度スケール上に配置された尺度感覚(川端2012)の共有はない。

また、「よく」は到達目標の実現度の高さを表すのと同様に、そのような状態が連続して起こっているかのような生起頻度の高さをあらわすと説明されるが、必ずしもそうとはいえない。

(33) 今月は例年に比べてよく雨が降る。

(34) 失恋を引きずっているのか、ここのところいつもよりよく忘れ物をする。

このような例について近藤(1986)は「太郎はよく芝居を見に行く」の例を挙げ、頻度の「よく」と「しばしば」や「ときどき」との相違として、「しばしば」などがその回数が多いことに注目する表現であるのに対し、「よく」は、「その回数性よりもむしろ太郎に関する状態説明、太郎という人はそういう人だったといった、太郎の性癖の一つを説明する表現になっている」と指摘することとも関係する。すなわち、事態が頻出していることをもとにそのような特徴的な傾向があるととらえ、「一定以上、ふつうよりは」と述べるのが「よく」である。「よく」の頻度の意味が、生起頻度の高さに起因するものではあるが、目立った特徴的な傾向として刷り込まれるものであり、その評価のための比較基準となるものは一般的で普通の状態になる。

このように、完全性を目指していない「よく」もあることが確認できる。

#### 4.2 「よく」の程度修飾の特徴

以上のことから、程度の「よく」の特徴をまとめると次のようになる。

- ① 「よく」と「よく」に修飾される内容Pが組み合わさった「よくP」は、事態の達成や実現を目指す中での発話者の設定する到達目標である。
- ② 「よく」は事態の実現度0と事態の実現した状態を両端とする程度スケールにおいて、到達目標への接近度や実現度が高いことを評価する。



③「よく」は事態の実現度の高さを目標として設定する中で、程度の大きさが無制限で開放的な程度スケールを設定できないため、そのようなスケールでは、一定以上のレベルに達したことを「よくP」で表すことがある。

「よく」が実現度の高さを表す場合には、基準が到達目標となるとともに、期待されるあり方も到達目標となる。頻度を表す場合は開放スケールを用いて基準以上であることを認定するとともに、期待されるあり方も基準を超えることであることとなり、量の多さを表す場合は両方の可能性があるといえる。これらの三つに共通するものは、期待されるあり方に合致していることで肯定的な評価になるという点である。このことから、到達目標である事態の達成・実現の認定を問題とする場面では、「よく」自体が実質的な概念性を保持しているのではないことがわかる。

## 5 評価の「よく」の意味を規定する要因

### 5.1 程度の「よく」に存在する前提

先にも述べたが、「よく確かめる」「よく乾かす」のような「確かめる」「乾かす」の達成したあり方としての到達目標とその達成・実現を「よく」が表す場合には、個人や場面に依存する。したがって到達したことや達成したことの認定には個人差も生じるという点で主観的なものである。一方、開放的な程度スケールでは、一定以上であることが到達目標であり基準でもある場合は目標が設定できるが、これも個人的な基準である。したがって、次のようなやりとりが起こることもある。

(35) カビが生えるといけないからよく乾かしてください。

(36) 生乾きの匂いがするけど、よく乾かしたのですか。

(37) いまから洗い直して、今度こそよく乾かしましょう。

(38) へえ、こんな短時間でよく [乾かし／乾き／乾かせ] ましたね。

上の例のいずれも、「よく乾かした状態」を到達目標としてその実現・達成を「よく」が示している。しかしながら、最後の例の「よく乾きましたね」「よく乾かせましたね」については、それぞれ、洗濯物が乾かないことや乾かすのは難しいので「乾かした状態」を求める期待は満たされないだろうという前提があるという解釈が成り立つ。

では、「よく遊ぶ」の場合はどうか。

(39) ??今日は天気がいいので、よく [遊びましょう／遊びなさい]。

(40) へえ、こんなところでよく「遊び／遊べ」ましたね。

事態の達成・実現を示す到達目標が設定しにくい無制限に程度が増加する開放的スケール用いる「よく遊ぶ」の基準は一定以上となる。したがって、「おおいに」という意味で「よく学び、よく遊べ」という言い方は可能だが、「食べる」や「考える」「確かめる」とは異なり、「よく遊ぶ」の到達目標を共有しにくい。

ただし、事態が達成・実現された「よく遊んだ」が到達目標の達成・実現と認定される基準が共有できた場合には、「よく遊んだ」の程度に関する議論ができる。前提となる基準がより高いところにあれば「よく遊んだとは言えない」と批判することも可能になり、前提となる基準が低い場合は、「思った以上によく遊んだ」と事態の達成・実現そのものを評価する意味になる。すなわち、事態の達成・実現の可否から、達成・実現の評価へと進むことになる。このとき、発話の前提となる基準をどのように捉えているのかが当該の発話における期待のあり方となる。

たとえば、(40)の文脈から、「こんな場所では遊ぶ（遊べる）とは思っていない」という否定的な前提があることが読みとれる。このとき、到達目標の達成・実現の可否を問題にしているのではなく、その目標の設定や事態そのものを前提と比較して評価している。文脈からわかる発話者の「こんな場所」に対する認識が「こわい」「危険」といった否定的なものであれば批判に、想定外のいい場所だとしたら賞賛になる可能性があり、文脈から読みとれる前提とともに、その行動をすべきかどうかという期待のあり方に左右される。これは、「よく乾かした」でも同様である。

「よく」が修飾する語句だけが「よく」の意味を規定しないということはこのようなことから確認できるとともに、程度や頻度から「評価」へと「よく」の意味が拡張する手がかりが確認できる。

## 5.2 評価の「よく」が修飾するもの

既に確認したように、程度や頻度の「よく」は否定の意味を持つ語句を修飾しないため、「よくP」の場合の目標値Pには肯定的な内容が来る。したがって、次のような例では、「よくP」にあたる「よく乾かす」「よく知る」という到達目標や基準を達成していないことを示している。

(41) 雨の日に履いた革靴は、よく乾かさないとカビが生える。

(42) 昨日会ったばかりなので、彼のことをよく知らない。

なお、これらは到達目標が「じゅうぶんに乾かす」「じゅうぶんに知る」であるが、到達目標を達成していないことを実現度の低さとして表示しているのではない。目標を達成しないことは期待されるあり方ではないという否定的な意味に解釈される。

これに対して次の例では、「雨に降られる」という到達目標を達成していないことを表しているのではない。

(43) 今日は断続的に雨が降っていたが、よく雨に降られなかったね。

この場合の「よく」は「うまい具合に」「幸運にも」などと置き換えることができ、「雨に降られなかった」ことを「よく」が修飾しているものといえる。「よく」は「雨に降られなかった」全体を修飾して「よく」で到達目標の達成・実現を認定し、評価している。

また、「よく捨てた」は、「捨てる」の性質上、「よく」の頻度の意味か事態生起の回数の多さをもとにした傾向を表す意味になるはずだが、次の例では「捨てた」という事態の達成・実現を「よく」で認定している。

(44) あれほど大事にしていたのに、よく捨てたな。

この例のような「よく」は、「意外にも」「立派にも」「感心にも」といった副詞に置き換えられるが、それは、「捨てたほうがいいが捨てられないだろう」という発話時の推測が関与していることが、文脈から読みとれる。

このように、(43)(44)は「雨に降られなかった」ことを幸運だ、「捨てた」ことを感心だと評価していることととらえられる。このような「よく」は、事態の達成・実現を認定するとともにそれを評価しているため、程度や頻度の意味とは異なるものと位置づけることができる。

#### 4.2 評価の「よく」が基準とするもの

では、評価の「よく」が出現するにはどのような条件があるのだろうか。

(41)(42)と(43)(44)は、「よく」の修飾している語句が到達目標であり、期待されるあり方であるのは同じで、それを実現したか否かの相違となっている。前者は期待されるあり方を達成せず、後者は期待されるあり方を達成している。

たとえば、次のような場合は複雑だが、この構図の基本は同じである。

(45) 太郎は彼と3年も一緒にいたのに、彼のことをよく知らないなんて言えるね。これには二つの解釈が可能である。一つは、太郎が「彼のことをよく知っている」

ということがない」として、「知っている」というあり方を達成・実現していないという意味を表す場合、もう一つは、太郎が「彼のことを知らないと言う」あり方を「よく」で達成・実現したと認定しているという意味を表す場合である。前者は期待されるあり方を達成していないという意味で、後者は期待に反するあり方を達成している意味で、いずれも否定的な評価を持つことになる。

なお、このような評価の「よく」には期待に反して「できた」ことや「できなかった」ことを問題にすることがある。「よく言える」「よく遊べる」「よく捨てられる」「よく黙ってられる」など、評価の「よく」が出現する時には可能の形式が共起する場合が多い。これは、「よくP」に反する期待があり、それを覆して事態の達成・実現をしたことを評価するため、可能の意味を帯びる傾向にあると考えられる。

これと類似するのが、関西方言の可能形式で、「よく」を用いる次のような例である。

(46) そんな高いもん、私の今の給料ではよう買われへん。

(47) いくらなんでも、そんなことあの人によう言われへんわ。

これらの「よう」は「可能」の「能く」とされるが、可能の意味をいったん度外視して考えると、「よく買う」「よく言う」という到達目標である事態の達成・実現がないことを表している。また、この発話の文脈には「買えない」「言えない」とは反対の「買おうと思う」「言うべきだ」といった前提や期待が存在する。「『よくP』でありたいしそうあることが望ましいがそうではない」という状況が文脈に存在していて、評価の「よく」が成り立つ文脈と似ている。「よく」の評価と可能の意味は、事態の達成・実現の認定を示すものが事態の達成・実現の認定を評価することになる段階で接近するのではないかという予測が成り立つ。

## 5. むすび

以上から、副詞「よく」の実質的な概念性は特定の語句と共起する際に保持されるが、程度や頻度の意味においては到達目標の達成・実現の認定を問題とするため、保持されていないことがわかった。そのような「よく」の評価の意味を持つようになったことについて、整理すると以下ようになる。

①ある語句を修飾して程度の意味を持つ「よく」が、発話時になんらかの予測とその予測に対してどのような期待があるのかということが影響して、評価性を帯

びる。

- ② 「よくP」において、Pでないことが予測されている状況で、Pに反する期待を持っていた場合は否定的評価、Pを期待していた場合は肯定的な評価になる。
- ③ 発話時の前提や期待を加味することによって、「よくP」という事態の達成・実現の認定を示すことから、事態の達成・実現を評価するものへと移行している。このとき、発話の文脈をふまえ事態への評価を表す副詞に置き換えることが可能になる。

これらをもとに、「よく」の意味を再度整理しておく。

**A 程度や頻度：**Pの程度を測る場面で、Pであるという前提のもとに0から目標値Pをもとにしたスケールを用い、「よくP」が到達目標Pを達成・実現したことを認定する。

**B 評価：**「よくP」が到達目標Pを達成・実現したことを認定するさいに、Pではないという前提で事態の達成・実現を評価する。

- a 「否定的な前提＋肯定的な結果＋否定的な前提を期待している」…驚きや呆れ、
- b 「否定的な前提＋肯定的な結果＋肯定的な結果を期待している」…褒めや賞賛

なお、関西方言の可能な「よく」との関係については、今後の課題としたい。

## 参考文献

- 小倉健太郎・Francis Bond (1998) 「日英機械翻訳における副詞訳語選択について」情報処理学会第56回全国大会予稿集、pp2-4 (273)
- 川端元子 (2012) 「程度副詞を分類する視点の考察」『愛知工業大学研究報告』47, pp115-124
- 川端元子 (2015) 「アスペクト形式『ている』を伴う可能動詞の意味と特性」『愛知工業大学研究報告』50, pp46-52
- 川端元子 (2016) 「副詞『よく』の評価性について」『愛知工業大学研究報告』51, pp12-19
- 工藤 浩 (1983) 「程度副詞をめぐって」『副用語の研究 (渡辺実編)』明治書院, pp176-198
- 近藤仁美 (1986) 「多義の副詞『よく』についての考察」『国語学研究』26, pp89-100
- 佐野由紀子 (2006) 「ありかたに関わる副詞としての「よく」について」『日本語文法の新地平1形態・叙述編』(益岡隆志・野田尚史・森山卓郎編)、くろしお出版、pp157-177
- 萩原孝恵 (2005) 「副詞『よく』の意味を探る一誤用文をもとにしたアンケート結果からの考察一」『昭和女子大学大学院日本文学紀要』16, pp1-12
- 森川結花 (2008) 「頻度の副詞『よく』をめぐって一文末表現との共起制限を通して見られ

る『よく』の素性」『大阪樟蔭女子大学日本語研究センター報告』15, pp21-34  
森本順子 (1992) 「副詞的機能とモダリティー『よく』について」『京都教育大学紀要』80,,  
pp71-79

(かわばた・もところ／愛知工業大学)